２００５年１１月９日

日本で祈っていてくださる皆様へ

お元気でお過ごしでしょうか？いつもお祈りとご支援をありがとうございます。ルワンダに来てから１ヶ月以上がたち、大分こちらの生活に心と体が馴染んできました。心の面では、こちらの人々のペースを受け入れ、私の方もゆっくりやっていくしかないとの覚悟ができました。体の面では、標高約１５００メートルのキガリでも夜ぐっすり眠れるようになってきました。まだまだ急な坂を上る時などには息が切れますが。

１０月２６日の午後から２７日の夕方まで、首都キガリの南方５０キロくらいのところにあるギタラマ州のギフマ村に行ってきました。訪問の目的は、村で行われているガチャチャ民衆法廷（ジェノサイド関与者を裁くために設けられた民衆法廷）を見学すること、そして、約１年ぶりにマテオさん（本名ヴェヌースさん）[注1]とパスカルさんという２人の友人に再会することでした。彼らと初めて出会ったのは、今から３年以上前のことです（その時の様子については、バプテスト女性連合発行『世の光』2004年２月号もしくはバプテスト連盟宣教研究所発行『宣研ニュースレター』55号http://www.bapren.jp/Senken/index.htmlを参照）。

ヴェヌースとパスカルとの出会い

この２人のことについて、初めてお聞きになられる方々のために、以前書いたり話したりしたことではありますが、彼らとの出会いについて簡単にご紹介します。ヴェヌースさんは、１９９４年のジェノサイド（集団殺戮）の生存者の１人です。ギフマ村では、１９９４年のジェノサイドによって、彼の母親と叔父さんを含む１８名のツチ系住民が犠牲になったということです。パスカルさんは、ヴェヌースさんの叔父さんを含む、数名の殺害に関与した殺人犯です。彼と初めて出会ったのは刑務所の中でしたが、罪を告白したために、１年半くらい前から仮釈放の処分でギフマ村に戻ってきているのです。

神様の不思議な導きにより、ヴェヌースさんとパスカルさんは、パスカルさんが仮釈放される前に、刑務所の外で言葉を交わしていました。ある日、パスカルさんは囚人仲間と共に町外れにあるレンガ工場の作業に借り出されていました。彼らがレンガ工場での作業開始を待っていたときに、ヴェヌースさんがそこを通りがかったのでした。彼に目を留め、歩み寄ってきたヴェヌースさんに、パスカルさんは自分が刑務所内で罪の告白をしたことを伝え、謝罪の言葉を述べました。驚くべきことに、ヴェヌースさんはそれを黙って聞き終えると一言、「告白できて本当に良かった」という言葉をかけたというのです。パスカルさんはこのヴェヌースさんの言葉に深い慰めを受け、ガチャチャ法廷が始まったら真実を余すところなく証言しようとの決意を固くしたのでした。

一方、ヴェヌースさんも、虐殺に関与した囚人たちの中にも、パスカルさんのように自分の犯した過ちを悔い、真実を証言しようとしている者がいることに励ましを受けているようでした。私がパスカルさんから刑務所で授かった挨拶の言葉を伝えると、ヴェヌースさんは顔をほころばせて「虐殺犯の中にも悔改めている者がいることをパスカルが証明しているんだ」と言いました。それまで終始暗い表情で話していた彼の顔から、その時始めて白い歯がこぼれました。

この２人のルワンダ人との出会いは、私にとって大きな希望を与えてくれる出来事でした。ルワンダの悲惨な紛争の歴史を考えると、この国の人々が憎しみを乗り越え、和解を成し遂げていくためには少なくとも数世代を要することでしょう。しかし、たとえ数は限られていても、既に赦しと和解への道を

注1　これからは調査をしていた時に使っていた「マテオ」という仮名ではなく、本名のヴェヌースを使うことにします。

歩みだしている人々がいるのです。私は、主イエスが既に現地の人々をご自身の和解の働きに招きいれ、用い始めておられることを知らされたのでした。

一年前の再会

　それから約１年半後、２００４年の８月に２人と再会することができました。初めてあった時には刑務所にいたパスカルさんは、２００４年の１月に仮釈放の身となり、年老いた母親やヴェヌースさんが住むギフマ村に８年ぶりに戻ってきました。彼は、村に帰ってきてからというもの、彼と同じフツ系住民から度々嫌がらせを受けているということでした。やがて始まるガチャチャ民衆法廷で彼が真実を証言しないように、口封じのために脅迫じみたことをする人々がいるからです。それどころか、あらぬ言いがかりをつけて彼を再び刑務所に入れてしまおうという謀略があるとのことでした。そこでヴェヌースさんは、もしそんなことが起きたら必ず彼を刑務所から連れ戻すように運動をするといって、パスカルさんを励ましているとのことでした。

　私は彼ら２人に私の気持ちを伝えました。「あなたたちがこのようにして、ここに一緒にいるということ、そのことに僕はとても励まされる。僕は、神様がきっとあなたたちを通して、この村で和解の働きを進めていかれようとされていると思うんだ」と。彼らも口々にその通りだと言っていました。パスカルさんは感極まって泣きだしました。そして、私たちは共に祈りました。主イエスが２人を支え続け、彼らの村で平和と和解の働き人として用いていって下さるように、そして、やがて村の人々が憎しみを乗り越えることが出来るようにと。そして、私たちは再会を誓うとともに、お互いを覚えて祈ることを約束しました。

ガチャチャ法廷公聴会の傍聴

　今回のギフマ村訪問中に、約１年ぶりに彼らと再会することが出来ました。今回彼らと会ったのは、ガチャチャ民衆法廷の会場になっている村役場の前の広場でした。ガチャチャ法廷がギフマ村で始まったのは、今年１月のことです。それから毎週木曜日には必ず人々が集まり、裁判を始める前の準備段階としての公聴会が開かれているとうことでした。公聴会では、ジェノサイド当時の状況についての目撃証言がなされます。それらの証言をベースに、ジェノサイドの被害者と加害者の両方を特定し、加害者一人ひとりに関する起訴状が作られることになっています。殺人などの凶悪な犯罪行為については、既にこれまでの公聴会で証言がなされ、現在は、略奪など物的被害の状況と、それに関与した人々を特定することが焦点であるとのことでした。

　公聴会の進行役は、村人たちが自分たちの中から選んだ９人の「草の根裁判官」の中の裁判長が務めていました。裁判長が繰り返し証言を促していたにもかかわらず、そこに集っていたほとんどの村人たちは押し黙ったままでした。私が以前調べたところによると、虐殺を逃れるためにツチ系住民が避難したり隠れたりしている間に、彼らの家畜や家財道具の略奪がフツ系住民の手によって広範に行われたことが分かっています。ですから、ギフマ村の人口の圧倒的多数を占めているフツ系住民にとって、略奪に関して証言することは、自分の家族や親戚、もしくは自分自身の罪を認めることです。その結果、賠償責任を負わされることになるわけで、人々の口が重くなるのも当然と言えば当然です。また、被害者であるツチ系住民の中にも報復を恐れて証言を控える人たちが少なくありません。

　大多数の参加者が沈黙を続ける中で、終始ヴェヌースさんとパスカルさんの２人が活発に発言を繰り返していました。ヴェヌースさんは、「略奪が広範に行われたことは明らかなのに、それに関する証言がほとんど無いのはどういうわけか。それに関与した人たちは、裁判が始まって糾弾される前に自ら名

乗りでて、私たち被害者に謝罪して欲しい」という趣旨の発言をしていました。一方、パスカルさんは、「私が自分が関わった虐殺に関して告白したことは、みなさんの知っている通りです。それは、略奪とは比べものにならないくらい重大な犯罪です。私が告白出来たのだから、略奪に関わった人たちにもそれが出来るはずだ」と、人々に語りかけていました。しかし、今回の公聴会は、これといった証言がなされないまま次週へと持ち越されることになり、開会の約３時間後に閉会しました。

心を揺さぶられた光景

公聴会の後、１時間くらいの短い時間でしたが、ヴェヌースさんの家でヴェヌースさんとパスカルさんと話をすることが出来ました。以前調査をしていた時に調査助手兼通訳をしてくれていた同じ村出身のフランシスさんも一緒でした。

ヴェヌースさんがお連れ合いと一緒に、私たち客人をもてなすための準備をして下さっている間、パスカルさんと私は、小さな居間の中央に置かれたテーブルをはさんで向かい合って座っていました。そこに 4 歳になったばかりというヴェヌースさんの末の娘さんがやってきて、パスカルさんに愛らしい笑顔で話しかけました。パスカルさんも柔和な笑顔でそれに応えました。そして、彼女の腕に擦り傷が出来ているのを見つけると、そこを撫でるようなしぐさをしながら、「もう痛くないかい」と優しく語り掛けました。その二人の打ち解けた様子は、パスカルさんがヴェヌース家の友人として受け入れられていることを示していました。

私たちは、自分の親族を殺害した犯人と自分の幼い娘が戯れている光景を容易に想像できるでしょうか？パスカルさんの過去を知る人たちは、彼がアバイスラム（イスラム団）というギャングのリーダーとして、大虐殺の嵐が吹き荒れる前から非道の限りを尽くしていたと証言します。当時はマリファナを常用し、いつも目をギラギラさせながら恐喝や強盗などを繰り返していたと言います。ジェノサイドが始まり、当時のフツ至上主義政権がツチ系住民抹殺をフツ系住民の大義として掲げたときに、パスカルさんは躊躇することもなく、殺戮や略奪を繰り返したというのです。それから１１年後の今、その彼が自分が殺害した被害者の親族の家で、その家の幼い女の子と戯れている。私はこの驚くべき光景を目にしたとき、胸の中に熱いものがこみ上げて来るのを感じました。その時はよく分かりませんでしたが、自分の理解をはるかに超えた圧倒的な愛（エフェソ 3:18－19）に心が揺さぶられていたのではないかと思います。

主の和解の働きに与る者たちの希望

冒頭でガチャチャ民衆法廷のことに触れました。この法廷は、「和解をもたらす正義」のプロセスとして、現ルワンダ政権が７年以上の歳月を掛けて準備をし、今年からようやく全国的に始まったものです。80 万人以上の大虐殺が起きたのはつい 11 年前のことです。その過去に向き合っていく作業が、ルワンダの人々にとって容易なはずがありません。人口の 80 パーセント以上を占めるフツ系住民の多くにとって、ジェノサイドの真実を語るとは、自分の親族を告発することに他なりません。またそれは、自分自身の罪と向き合い、それを告白することに他ならず、私たち人間にとって困難を極める事柄です。[注3] また、ガチャチャ民衆法廷のあり方に関して、フツ系住民が不満を持っている現実があります。ガチャチャ法廷の場では、ジェノサイドとは質的にも規模的にも比較は出来ないものの、現政権側がフツ系住民に対して犯した戦争犯罪について語ることが禁止されています。そのため、多くのフツ系住民は

[注3] 刑法上の犯罪を犯していない人でも、ジェノサイドを是認した人々、是認しなくてもそれを傍観せざるを得なかった人々など、多くの人々が罪の意識を持ちながら生きているという現実があります。

ガチャチャ法廷を、現政権を実質的に支配しているツチ系住民による「勝者の正義」に過ぎないのではないかと考えているのです。[注4] そういったことから、ガチャチャ法廷が政府の思惑どおりにそう簡単に「和解」をもたらすものには成り得ないだろうと私は見ています。

そんなことを考えながら、私は、ヴェヌースさんにこれまで開かれてきた公聴会の印象について聞いてみました。その日の公聴会で彼とパスカルさんの孤軍奮闘ぶりを目にしていた私は、彼がきっと失望感を抱いているに違いないと思いました。しかし、私の予想に反して、彼は、村人たちの間で起き始めているある「重大な変化」について、熱っぽく語り始めました。彼によると、はじめは沈黙を保っていた村人たちの中から、彼とパスカルさんの励ましと促しを受けて、少しずつ大虐殺当時のことについて語り始める人たちが出てきているとのことでした。具体的には、これまでに計 5 名の村人たちが虐殺関与の罪を認めて公に謝罪しました。そのうちの 3 名は、既に自白をした虐殺犯の証言の中で彼らの関与が明らかになったため、そうせざるを得なかったのだろうとのことでした。しかし、残りの 2 名は全く自発的にヴェヌースさんの家を訪れ、自分たちの罪を告白し赦しを請うたのだそうです。そして、公聴会の場でも告白と謝罪を公にしたとのことでした。政府の「和解政策」により、罪を糾弾される前に自白した加害者の刑期は、大幅に軽減されることが定められています。しかし、ヴェヌースさんは、その２名の告白と謝罪が、単に減刑を目当てになされたものではなく、真実なものであったと断言しました。彼らが自分の家を訪ねてきてくれたこと、そして、心から謝罪してくれたことに大きな慰めを受けているとも話してくれました。

私は、ヴェヌースさんとパスカルさんを励まそうと思ってその日ギフマ村を訪れました。しかし、彼らとの再会を果たし、逆に励まされたのは私の方でした。彼らを取り巻く状況が依然としてたいへん厳しいものであることに変わりはありません。わずか数名が罪を認めて謝ったところで、すぐに村人たちの間に横たわっている根深い憎悪と不信が無くなるわけではありません。何者かがいつ彼らを暗殺しようとするとも限らない。それが彼らを取り巻いている状況です。しかし、傍観者として外から見ていたのでは決して見ることの出来ない、闇の中に輝く一筋の光を、この２人は確かに見出していたのでした。

だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。（第二コリント 2：17－18）

彼の証によると、パスカルさんは、刑務所の中でイエス・キリストによる罪の赦しの福音に出会い、５年に及ぶ魂の遍歴の末、自分の罪を告白しました（『世の光』０４年２月号）。そして、ヴェヌースさんとの出会いによって、キリストの無限の愛と赦しを具体的に体験することになったのです。ヴェヌースさんもまた、かつて彼が私に証してくれたように、これまで主イエスの愛の内に生かされ、その中で主による癒しを体験してこなければ、パスカルさんをこれほどまでに受け入れていくことは出来なかったでしょう。かくして、この 2 人は主の愛によって新しくされ、村の人々の和解のために働く主の同労

[注4] 現政権は、自分たち側（ルワンダ愛国戦線）の戦争犯罪者については、軍事裁判によって厳正に処理してきたと主張しています。しかし、万一未だに適正に処理されていないケースがあれば、通常の裁判所に訴えるようにと国民に呼びかけています。しかし、多くのフツ系住民が、「政府側の裁判所」でそれらの戦争犯罪を告発することはあまりに危険で、ほぼ実現不可能なことだと考えています。このように、現政権が、一方向的な「和解」政策を推進し、それに反する言論を制限している中で、真の和解を達成していくことが出来るのか？そのような政治的な制約を受けながら、実際にどのような展望を持って平和と和解のために働いていくことが出来きるのか？これらの疑問について私がどのように考えているのか、また時を改めて説明したいと思います。

者として歩み始めているのです。

　ギフマ村を離れる前、私は彼らのために祈り続けること、そして、彼らのことを主にある日本の兄弟姉妹たちに伝えることを約束しました。彼らは皆様に何よりも、彼らが主の導きのうちに、これからも村の人々の和解のために共に働いていけるように祈って欲しいと言っていました。私が皆様の祈りによって日々励まされているように、彼らにとっても、皆様の祈りが大きな励ましと力になることでしょう。遠く離れていても、祈りのうちに繋がれていることを感謝いたします。皆様の上に主の豊かな守りと導きがありますように、お祈りいたします。

佐々木　和之